

第14回日本-ボリビア 国際医学・消化器シンポジウム —大統領選挙に伴う混乱に遭遇して—

国際医療福祉大学市川病院消化器内科 教授
特定非営利活動法人日本-ボリビア医療友好協会 理事長
一般社団法人日本ボリビア協会 副会長

森下 鉄夫



第14回日本-ボリビア国際医学・消化器シンポジウム (XIV Simposio Internacional Boliviano-Japones de Medicina y Gastroenterologia) が、一昨年2019年(令和元年)10月24日~25日に南米のボリビア多民族国(旧ボリビア共和国)(ボリビア)のサンタ・クルス・デ・ラ・シエラ市(サンタクルス、ボリビア第2の都市)で、ボリビアキリスト教大学 Universidad Cristiana de Bolivia (UCEBOL) と共同で開催されました。

一昨年の事柄になりますが、御報告申し上げます。



シンポジウムの直前10月20日にボリビアでは大統領・国会議員選挙が行われました。投票日の前後から開票・集計手続きに対する不信任などを契機としてファン・エポ・モラレス・アイマ大統領率いる政府の支持派と反政府派の間で死者がでる抗議活動や衝突が起き、反政府派により人の移動・物流を止める道路封鎖が各地で行われるなど、ボリビア国内は混乱状態になりました。

12名の日本人医師がシンポジウムに参加を予定していましたが、1名はボリビア行きを日本で断念され、2名は到着したサンタクルスのビルビル国際空港(日本の政府開発援助により1983年に完成した)から直接日本へ引き返さざ

るをえませんでした。

他の4名はこの混乱以前にボリビアへ無事入国していました。私ども5名は10月23日にペルーのリマからサンタクルスに入国する予定でしたが、ボリビアの混乱のため搭乗予定の飛行機が欠航となりリマに1泊し、翌日の早朝5時5分にビルビル国際空港に到着しました。空港には事務局長のDr. Sayuri Igarashi(五十嵐さゆり)が出迎えてくださり、UCEBOLが用意した救急車が待機してくれていました。道路封鎖のため尋常な方法ではホテルにたどり着けないため、脳外科医師が運転してくださる救急車が日本人救急患者をUCEBOL病院へ送るという設定で宿泊ホテルに向かいました。心配そうな素ぶりを演じる付き添い役の4名とともに、私が救急患者役をして車内に横たわりました。途中、サンタクルス地域を支配しようと道路を封鎖していた反政府派が設置した複数の検問所で検問員により車内がチェックされた時は日本へ引き返さざるをえない事態になることを恐れ緊張しましたが、なんとかホテルにたどり着きました(写真①)。

宿泊ホテルは、当初予定されていた Hotel Costa del Sol から UCEBOL より車で5分ほどの Hotel Terranova に変更されました。シンポジウムは UCEBOL 構内の講堂で行われまし



①空港からホテルによく到着できた先生方と事務局長の Dr. Sayuri Igarashi (中央)。右が空港から乗ってきた救急車



②参加くださった日本の先生方

た。私どもは2日間とも検問が一時的に解かれそうな早朝を狙って UCEBOL が用意したバスに乗り、会場に参りました。途中、前の晩の検問所の焼き火跡が各所に見られました。

シンポジウムのスケジュールや会場は一部変更され、日本人医師9名に加えコロンビア・チリの参加医師2名による講演は25日午前と午後集約して行われました。(写真②)。出席できなかった3名の医師の講演は代読されました。道路封鎖のため会場へ自転車か徒歩でしかたどり着けないなか、医師・医学生など124名の方々が講演を聞きに来てくださいました(写真③)。

24日に日本側による答礼パーティーが行われました。いつもの答礼パーティーと異なりホテルの食堂で小規模で極めて簡素に行われましたが、前述のコロンビアやチリの医師も交え和気藹々と懇親を深めることができました(写真④)。残念ながら今回は恒例の日本人女性医師による茶道のお手前披露やボリビア人女性への浴衣の着付けはできませんでした。

また、サンタクルス在住の日系医療関係者の方々との懇親会が予定され楽しみにしておりましたが、これも中止せざるをえませんでした。

帰途は27日早朝4時44分発の飛行機でサンタクルスを出発しました。ホテルから空港へは空港タクシーを予約・確保し(料金は通常の4倍でした)、複数の検問所をEチケットを見せながら突破しました。



ファン・エボ・モラレス・アイマ前大統領はボリビア史上初めての先住民出身の大統領で国内総生産・国民所得の向上や中間層の拡大などの成果も挙げましたが、前述のように一昨年(2019年)10月20日の大統領選挙で法律上当選したものの、開票・集計結果が不正に操作されていたとの疑惑を招き抗議活動が行われ、国家警察、ボリビア国軍、一部の官僚や政治家からも辞任を要求される事態となりました。11月10日に再選挙実施と大統領辞任を表明し、11月11日メキシコさらにアルゼンチンに亡命しました。その後、ヘアニネ・アニェス・チャベス上院副議長が暫定大統領に就任しましたが、大統領選挙は11月10日さらに昨年(2020年)5月3日、9月6日と予定が延期され、1年ぶりの10月18日に実施され、モラレス前大統領と同じ政党のルイス・アルベルト・アルセ・カタコラ氏が新大統領に選出されました。



今回のシンポジウムは、ボリビア側会長をUCEBOL学長の Dr. Soo Hyun Chung、事務局長を Dr. Sayuri Igarashi が務められ、日本側会長は森下が務めました。

日本から慶應義塾大学、千葉大学、東邦大学、獨協医科大学、福島県立医科大学、長崎大学、国際医療福祉大学より12名の先生方が参加され特別講演をされました。講演は消化管微小循環、シャーガス病、消化管感染症、高地消化



③ 道路封鎖などの混乱の中参加して下さったシンポジウム出席者



④ 日本側主宰による答礼パーティー

器疾患、内視鏡異物除去治療、大腸出血治療、ヘリコバクターピロリ菌除菌治療、医療コンピュータの活用、女性医師の活動など基礎・臨床・社会医学と多岐にわたりました。特に小腸バルーン内視鏡・カプセル内視鏡などの最新の内視鏡診断・治療なども紹介され、聴衆に感銘を与え大変充実したハイレベルな学術集会となりました。また、胃がん・ヘリコバクターピロリ菌感染症の内視鏡診断について若手医師へのクイズ形式による教育セッションも設けられました。

シンポジウムには前述のごとく124名のボリビア人医師・医学生が出席されました。第1回(1962年)から第14回シンポジウムまで延べ214名の日本人医師、1名の日本人看護師、4,586名のボリビア人医師・医学生、297名の他国の医師、24名のボリビア人看護師が参加されました。



私たちは本シンポジウムを打ち解けた雰囲気のもとに国際友好を楽しみながら、消化器のみならず基礎・臨床医学の各領域さらには看護領域やコメディカル領域も含めた学際的学術集会および若手医療者の教育集会へ発展させることを目指しています。既に消化器病学に加え微小循環学、微生物学、感染症学、熱帯医学・寄生虫学、医化学、小児科、整形外科、泌尿器科、皮膚科、呼吸器科、腫瘍学、総合医学、予防医学、歯科・口腔外科、看護学、コンピュータテ

クノロジー領域の先生方が御講演くださっています。今後も諸先生の御参加をお願い申し上げます。なお、シンポジウムは英語・スペイン語・日本語間で同時通訳または逐次通訳されます。医学・医療を通して日本とボリビア・南米の友好・親善・協力に少しでもお役に立てればと願っています。

御講演・御参加くださいました竜崇正先生、三浦左千夫先生、唐澤直子先生、細江直樹先生、東郷剛一先生、中嶋均先生、古谷賢太先生、池野義彦先生、根本鉄太郎先生、神谷研次リンピラス先生、平山謙二先生(順不同)に感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 森下鉄夫: 日本・ボリビア医療友好協会. *W'Waves*, 9:26-27,2003
- 2) Morishita T.: Non profit organization Japan-Bolivia association for medicine and friendship. *W'Waves*, 14:102-103,2008
- 3) 森下鉄夫: 第9回日本・ボリビア消化器国際シンポジウムと第30回パンアメリカン消化器病学会特別シンポジウム. *W'Waves*, 13:24-25,2007
- 4) 森下鉄夫: 第10記念回日本・ボリビア消化器国際シンポジウム. *W'Waves*, 17:34-35,2011
- 5) 森下鉄夫: 第11回日本・ボリビア国際消化器シンポジウム. *W'Waves*, 19:51-52, 2013
- 6) 森下鉄夫: 第12回日本・ボリビア国際医学・消化器シンポジウム. *W'Waves*, 22:21-22,2016.
- 7) 森下鉄夫: 第13回日本・ボリビア国際医学・消化器シンポジウム. *W'Waves*, 25:28-30,2019

(特定非営利活動法人日本・ボリビア医療友好協会ホームページ <http://www.nippon-bolivia-iryoyuuko.jp>)